

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

巻頭言 「期待と覚悟」

(保守バプテスト同盟津田沼教会牧師、聖書宣教会評議員) 森 恵 一

神学校に向けられる要請は実に様々です。充実した専門教育を、内面の鍛錬をしっかりと、語学は基本だ、神学も徹底的に、実践神学をもっと充実させて、実習や研修の機会を増やして、でも早く卒業させて、次世代の育成は任せた、教会の方針を大切に・・・等々。念のため、学校側から漏れ聞いたのではなくて、牧師同士の間で語られていることや、かつて学生時代に自分たちが言い合っていた事柄です。当時の同輩たちが今は教師陣に名を連ねていますから、思い出しては冷や汗をかいているかもしれません。冷静に考えればずいぶん無茶な声ですが、きっとそれは神学校に対する期待と信頼の表れなのだろうと思います。だから、教会は遠慮などせず大いに求め、要請していくほうが良いでしょう。もし、初めから諦めに走り、何も要請しなくなったら、それは神学校の終焉であり、日本の諸教会にとって深刻なダメージとなるでしょうから。教師の方々も、だからこそ時に耳の痛いことや、的外れなことも含めて、精一杯応えようとして日々奮闘しておられるようにお見受けします。

ただ、牧師になってそれなりに長く過ぎた者として思うのは、神学校での教育や訓練だけでこの働きをやっていけるはずはない、ということです。知識は詰め込んだとしても、それが毎週の説教で、あるいは人々と関わる時に、どのようにして生きた言葉として発せられていくのかは、年月を積み重ねながら体得し、その中で神様によって教え導かれていく以外にはどうにもなりません。仕上がった人材を提供してほしいと神学校に求めるのは、もともとあり得ない話なのだという事は、誰よりも諸教会の牧師たち、信徒の方々自身が実感していることのはずです。

では神学校が果たす役割は何か。人によって考えることは違うでしょうが、それは下地作りにある、と私は思っています。聖書にしっかり向き合う素地、神の御心を尋ね

求め、御心に沿って物事を見定めていく、つまりは神学するための素地、あるいは人と関わること、信仰をこの世界の中で実践すること、牧師として教会の務めに携わるための様々な



資質、等々、要するに神の前に一人の信仰者として生きていく素地を養うことです。むろん、素地そのものを形成しようとしてもうまくはいきません。だからこそ徹底的に聖書の言葉と格闘する日々を過ごしたり、神学的な事柄を突き詰めて語り合ったり、寮生活や教会奉仕の中で励まされ、突き崩され、喜びを覚えたり、悲しみを経験したり、そういう中で素地は作り上げられていくはずですが。時には偏りが出たり、しくじりかけたり、理想論だけで突っ走ろうとしたり、そういった経験を通してまた、神の前に立たされている自分を見出し始めることができるのも、いわば研修期間中の特権とでも言いましょうか。そこには、苦悩の中で、神が自分に与えておられる道は違ったのだと知ることになる機会も含まれます。そういう挫折、いや方向転換の可能性を認める覚悟は、神学校としての使命に必須だとも思っています。

ですから、たくさんの期待と要望を神学校に傾けつつ、同時に、教会は、あるいはそこで学ぼうとする人々は、自らに言い聞かせていくべきでしょう。ここでの取り組みはほんの始まりに過ぎないのだ、と。そしてだからこそ、もっと先を目指して進むための素地を是非とも整えていきたい。そう願う、そのように励ます人々と教会によってこそ、この学舎は確かに用いられていくはずですが。むろんそれは、聖書宣教会だけでなく、すべての神学校に共通することなのですが。

「聖書は誤りなき神のことば」

～シカゴ声明再考～(その2)

聖書宣教会 校長 鞭木 由行

無謬性と無誤性

前回読んでくださった読者の方から「無謬性と無誤性の違いは何ですか」というご質問を受けました。その質問はもっともで、改めてこのことを確認してから前回の続きを考えたいと思います。この二つの神学用語を論じるとき、その意味が少しずつ変化してきたことを見過ごすことはできません。現在では「無謬性 (infallibility)」というとき、それは主に聖書が「私たちの教理や信仰生活を誤って導くことがない」という聖書の信頼性や真实性を指すために使われています。一方「無誤性 (inerrancy)」は、聖書の信頼性の側面だけではなく、聖書の記述が、科学的歴史的分野においても誤りが無いという意味を込めて用いられています。この二つの用語は、もともと意味の上では厳密な使い分けがなく、どちらも誤りなき神のことばを表現するために用いられていました。しかし、「聖書には誤りが無い」という意味をより厳密に定義しようとする議論を経て、それぞれの言葉の持つ意味の強調点が変化し、上記のように区別して用いられるようになりました。特に、聖書批評学の興隆の中で聖書には歴史的科学的記述の面では若干の誤りがありうることを主張されるようになり、その結果「無謬性」の意味は縮小して「信仰者を教理や道徳的な問題に限って過って導くことがない」ことを意味するようになっていったのです。そうすることによって、聖書の細部には若干の誤りがあっても、なお「聖書は誤りなき神のことば」という告白を維持することができると考えました。しかし、このような後退した聖書観に反対し、聖書には歴史的科学的な客観的記述においても誤りはないと考える人々は、もはや無謬性を主張するだけでは不十分であると考え、文字通り聖書には誤りが無いという主張を込めて無謬性と共に「無誤性」を主張するようになりました。そういうわけで現在では無謬性は

狭い意味で「聖書は誤りのない神のことば」を主張し、無誤性はもっと広い意味で聖書の誤りなき性格を主張していると言えます。無誤性は、本来無謬性の中に含まれていたはずですが、両者は次第に分離していくことになったのです。現在無誤性を主張する人々も、無謬性を認めていることは言うまでもありません。ですから問題は無謬性か無誤性かではなく「無誤性を認めない無謬性」か、「無誤性を認める無謬性」かという構図になっています。

先日出版された藤本満氏の『聖書信仰：その歴史と可能性』は前者に立っているようです。氏によれば（あるいはスタンレー・グレンツによれば）プロテスタント・スコラ主義の時代や旧プリンストン学派の時代に聖書を教理の土台とするために、聖書は無誤でなければならないという要請から、無誤性という新しい理解が生じてきたとのこと。しかし、これは一面的過ぎるでしょう。現代的な意味での無誤性はなかったとしても、無誤の聖書という理解が、初代教父以来一貫してあったことについての歴史的議論が十分になされてはいません。私たちは無誤性は新しい教理だとは考えていませんし、そもそも無謬性と無誤性を切り離すことができるとは考えていません。なぜなら記述に誤りがあるのに、過って導くことが無いというのは矛盾だからです。

このような無誤性を巡る議論が、福音派に亀裂を生じさせる要因になってきたことは残念なことです。私には、このような論争は、実り多い議論になるとは思われないからです。無誤性を認めるか認めないかという議論は、本来であれば特定の聖書箇所解釈の問題であったはず。私たちはみな、聖書には未だ解決が困難な箇所があることを承知していますし、また一見すると矛盾していて説明ができないように思われる箇所にも直面することもあります。その

.....

ような聖書箇所について「これは聖書の記述が誤っているからだ」と結論づけると、そこには無誤性の否定という神学的問題が生じてくるのです。こうして、本来聖書解釈の問題であったものが、いつの間にか「無誤性か無謬性か」といった神学的議論へと変質してしまうのです。理解が困難であることを認めた上で、性急に「誤っている」と結論しないで、忍耐強く聖書本文と向き合い、探求していくことが本来の私たちの使命ではないでしょうか。歴史批評学の影響力が大きかった時代、その勢いに流されて、誤りがあると結論してきたことがあったとしても、19世紀以来の歴史的批評的研究の根本的前提が崩壊した現在、私たちには聖書そのものを一層研究して行く努力が必要です。

また最近、聖書を「物語」として読むことが、あちこちで聞かれるようになりましたが、このことにも注意が必要ではないでしょうか。この物語的解釈は、歴史批評学のもとで聖書を細かい資料に分解して解釈しようとした手法への反動であると同時に、かつて「神の出来事に参与する」というような理解が、今また「神の物語に参与する」というような言い方で復活しているように思われます。しかし、聖書はやはり物語ではなく、あくまで聖書です。そこには律法があり、歴史があり、知恵文学があります。さらにスピーチ、物語文、記録文、法律文、祭儀条令、契約、書簡、諸リスト、詩歌、格言等々多様なジャンルを含んだ書物です。その聖書本文をありのままに研究していくことが必要なのです。そうすることで、聖書の「意味」を「ことば」から分離しないことが重要だと思えます。

このような問題によって日本の福音派諸教会の一致が妨げられてしまうとしたら残念なことです。無誤性を福音派のリトマス試験紙として用いないようにすることが必要です。無誤性を主張する立場の人々はその前提から出発するので、聖書の歴史的科学的詳細に関して、あるいは聖書の構成、伝達、正典化の複雑な歴史に対して、正直な探求を認めないというような検討はずれの批判を受けることがあります。逆に無誤

性を認めない立場の人々は、聖書に誤りがあると結論して、それ以上の探求を放棄してしまう危険があります。聖書が誤りのない神のことばであることを堅持しつつ、誤りがあるないという議論ではなく、聖書理解そのものを深めていくことが福音派の使命です。今日の日本の教会の現状を見る時、真に急務なのは教会が信仰の一致を保ち、その協力関係によって福音宣教が前進していくことではないでしょうか。

第10項（肉筆原稿と無誤性）

前置きが長くなりましたが、再びシカゴ声明の無誤性に関する第2番目の項目を見ましょう。今回は第10項で、そこでは聖書の原本と無誤性との関係です。

第10項「靈感は、厳密に言えば、聖書の原本にのみ適応されること、その聖書本文は、神の摂理によって私たちの手に入れうる諸写本から、高度の正確さをもって確認できることを私たちは主張する。私たちはさらに、聖書の写しや翻訳が最初の本文を忠実に表現する範囲において、神のことばであることを主張する。

原本が存在しないことによってキリスト者信仰の本質的要素が影響を受けるということを私たちは否定する。私たちはさらに原本が今残存していないことによって、聖書の無限の主張が無効また不適切とされるということも否定する。」

この第10項では、聖書の原本（聖書著者たちの肉筆原稿）に関連して、二つの主張と、二つの否定が述べられています。まず靈感は原本においてのみ起きたということです。従って、聖書の無誤性も当然原本においてのみ確保されました。このことは、私たちの手元に残された聖書の諸写本間には、わずかではあっても現に相違が見られることからして、当然のことです。筆写し、それを伝達する途上で誤りが侵入した可能性を否定しません。このような写本作成の過程において最小限の誤りが入り込むことは、それが人間の作業であるゆえに不可避のことでした。

しかし、同時にその本文を筆写し、伝達することにおいて「高度の正確さ」が保持されたことも事実です。私たちが写本を見比べると、それが並外れた正確さでコピーされたことを納得させられます。新約聖書の時代から現代に至るまで、現存する600以上のヘブル語写本間には驚くほどの一致があります。ケニコット聖書で有名なベンジャミン・ケニコット(1718-1783)の分析調査によれば、旧約聖書の諸写本に含まれる子音の文字数は総計で約2兆8千4百万字ですが、その中の約90万字に相違(誤りではない)が見られるとのこと。しかし、そのうちの75万字は母音表記に使われたYとWの違いで、事実上無視して良いものです。従って相違の確率は1890分の1(つまり0.052%)でしかありません。その相違とは、挿入、省略、置換、子音の変化、語彙の変化などです。従って、その筆写がいかに正確であったかが分かります。写本の忠実さの点で最も雄弁な事例は死海写本のイザヤ書の巻物でしょう。旧約のマソラ本文より約1000年間も古い写本が出現しても、母音を表記するための子音を除けば、殆ど変更の必要はありませんでした。

このような事実は、新約聖書においても顕著に見られます。新約聖書の最古の写本は、エジプトで発見されたヨハネの福音書の一部を記したパピルス文書です。その筆跡から紀元後125年から150年に書かれたことが分かっています。それ以後、無数の写本、古代訳、引用などを用い新約本文は校訂されました。その結果について大英博物館館長フレデリック・ケニヨン卿は次のように言明しています。「原本が書かれた年代と現存する最古の写本との間にある時間的経過は、事実上取るに足りないほどわずかであるので、聖書は、本質的には書かれたままの形で、我々に伝達されてきたことを疑う究極的な根拠も今や取り去られてしまった。新約聖書の各書に対する真正性と全体的な完全性は、究極的に確立されたと考えることができる。」以上から聖書の原本は現存していませんが、本文を伝達することにおいて高度の正確性が保持されたゆえに現存する写本が忠実に原本を再現していることを

主張しています。

このような意見に批判的な人々は、いくら無誤性を原本に限っても、原本が失われており、完全な写本も現存していないので、そのような主張は無意味であると考えます。おまけに無誤性を主張する人々に対して、本文批評学を過大評価していると言います。しかし、このような問題と向き合うとき、やはり本文批評の重要な貢献があることを忘れる事はできません。しかも、大切なことは、本文批評によって曖昧な箇所が明らかになっていることです。例えば新約聖書では、マルコの福音書16章9節以降の長いテキスト、またヨハネ福音書の7章53節から8章11節のような箇所です。このように曖昧な箇所がどこかは分かっているので、それは避けることができます。また、たとえ本文批評が細かい点まで確認できないような箇所はあっても、それは信仰や教理に決定的な影響を与えるような聖書箇所ではありません。原本が高度の正確さをもって再現されており、それが原本に忠実であるかぎり翻訳された聖書についても、私たちはそれを神のみことばであると主張するのです。

またある人々は、神にとって啓示を文字として残すことがそこまで重要であったならば、靈感の時点だけではなく、その文字の筆写や伝達過程においても神の奇跡的守りがあるはずではないか、それが無いのは、神が無誤性というようなことにこだわっていなかったからであると考えます。あるいは、また神は不完全な写本も不完全な翻訳もこれまで用いてこられたので、厳密な無誤性は聖書の考えではないという主張もなされたりしました。しかし、このような主張は、次のことを見過ぎてしています。この無誤性の教理は、もともと神が聖書の著者であることから導き出された教理であるということです。そこに神の圧倒的な靈感があり、それゆえに神の真実が聖書本文をおおっているという真理から無誤性は導き出されたのです。

2016年度 聖書宣教会講座案内

2016年度は次のようなプログラム、講座を予定しています。11月5日(土)のオープンデイを始め、聖書講座、教会合唱講座はどなたでも参加できます(オープンデイ以外は要申込)。お待ちしております。

聖書講座 (金曜日10:30~12:10)

前期:「サムエル記(前半)」(久利 英二)
4月15日~9月30日(15回)
於 ぶどうの樹キリスト教会(四ッ谷)
後期:「サムエル記(後半)」(久利 英二)
10月~3月(15回)

教会合唱講座 (火曜日18:30~20:30)

前期:「賛美:会衆賛美、奏楽、聖歌隊-10 礼拝の賛美、聖歌隊と会衆、奏楽者」
(飯島 千雅子、遠藤 かおる)
4月26日~10月18日(9回)
於 浜田山キリスト教会
後期:10月~3月(9回)

第41回 夏期研修講座

期間:7月11日(月)~13日(水)
会場:奥多摩福音の家
対象:牧会者とその配偶者
テーマ:「聖書信仰」

今年の夏期研修講座は「聖書信仰」と題して3日間の学びを計画いたしました。これは、昨今の状況を踏まえて、もう一度このテーマを再考し、今後に備える必要があることを覚えたからです。「聖書信仰」は、当然とされている、時代の流れの中でその意味するところは次第に変化して行きます。聖書信仰を巡る新しい動きを見据えながら、何が問題なのか、私たちの拠り所は何か等を、もう一度再確認したいと思っています。皆様の参加をお待ちしています。

講師:聖書宣教会教師ほか
詳細:別紙案内、ウェブサイトをご覧ください。

第32回 教会音楽夏期講習会

期間:7月27日(水)~29日(金)
会場:聖書宣教会(宿泊は近隣の「玉川苑」)
対象:聖歌隊員、聖歌隊指導者、奏楽者、独唱者等、礼拝や教会の諸集会で音楽の奉仕に携わっている方、および奉仕の準備をしたい方
「みことばと音楽」-礼拝-

教会音楽夏期講習会の今年のテーマは「みことばと音楽」です。これは、みことばを歌おうとする教会音楽にとって、最も大切なテーマでしょう。このようなテーマは、ダビデが任命した音楽家たちのことを思い起こさせます。例えばエドンは立琴を持って主をほめたたえましたが、その動きは「賛美しながら預言する」(I歴25:3)ことでした。当時の礼拝においても賛美が、みことばを教えるために大きな役割を果たしていたことが分かります。多様化する教会賛美のなかで、もう一度預言としての賛美を取り戻したいと願っております。今年も、あるいは今年こそ、是非ご参加をご検討ください。お待ちしております。

講師:聖書宣教会教師・講師
詳細:別紙案内、ウェブサイトをご覧ください。

(このほか、聴講制度があります。詳細は事務局まで)

2016年度 聖書宣教会主要年間予定

2016年

4月 5日(火)	入会式
4月 8日(金)	前期授業開始
5月19日(木)	祈りの日
6月 7日(火) ~ 6月 8日(水)	特別講義
6月11日(土)	教会音楽のひととき
7月 1日(金) ~ 7月 7日(木)	集中講義
7月 8日(金) ~ 8月28日(日)	夏期調整期間
7月11日(月) ~ 7月13日(水)	夏期研修講座
7月中旬~	キャラバン伝道
7月27日(水) ~ 7月29日(金)	教会音楽夏期講習会
8月31日(水)	前期授業再開
10月 6日(木)	前期授業終了
10月 7日(金) ~ 10月19日(水)	秋期調整期間

10月11日(火) ~ 10月12日(水)	リトリート
10月20日(木)	後期授業開始
11月 5日(土)	オープンデイ
11月18日(金)	祈りの日
11月26日(土)	賛美礼拝
12月11日(日) ~ 1月 6日(金)	クリスマス調整期間

2017年

1月 7日(土)	後期授業再開
2月11日(土)	信教の自由を守る日
2月13日(月)	入会試験
3月 8日(水)	後期授業終了
3月 9日(木)	卒論発表会
3月13日(月)	第58回卒業式

編集後記

一年度を振り返り、主の「みわざの力」、「偉大さ」、「豊かないつくしみの思い出」、「義」を熱心に語り、ほめ歌う思いへと押し出されています。主の誉れを語り、主の御名をほめたたえることが、私たちの全存在を貫きますようにと祈りを新たにしています。

いつくしみ深く、恵みに富んでおられる主が、諸教会と読者の皆様の上に豊かに臨んで祝福し、主の栄光を反映させて、輝かせてくださいますように心からお祈りいたします。(A)